

沖縄における禹王遺跡とその歴史的意義

植 村 善 博

1. はじめに

禹王遺跡とは禹王を祀る廟、禹王碑、彫像や肖像画、禹の文字を記した石碑などをさす。禹王とは約4000年前の古代中国において黄河の治水に成功して夏王朝初代帝王となった伝説上の人物。酒を断って善政をおこなった聖人君主として孔子らによって尊敬されている。黄河や長江の流域には禹王を祀る廟や遺跡が多く分布し、治水神として深く信仰されてきた。また、中国の国語や歴史教科書にも取り上げられている。この禹王が日本において治水神として信仰されてきたことを最初に総括的に報告したのは大脇・植村編（2013）である。その後、王（2014）や植村・木谷（2015）などにより論じられている。治水神として禹王が最初に祀られたのは1228年、京都鴨川五条中島の禹王廟とされる（瀬田1994・山田2000）。その後約400年間の空白をはさみ、1630年代以降、徳川幕府の儒学政策と教育の普及により禹王の事蹟が広く認知され、全国的に遺跡が分布するようになる。特に、利根川、酒匂川、木曽三川、淀川などにおける水害常襲地域を中心に治水神として強く信仰されてきた。明治維新後においても増加の一途をたどる。日本の禹王遺跡は地域住民や治水関係者の水害除去への強い願いを反映した治水神・禹王信仰として特徴づけられる（大脇・植村編2013）。禹王遺跡の数は2013年の57件から2015年末に91件に増加している。しかし、沖縄県には南風原町の宇平橋碑1件が知られるのみであった（大井2013）。

筆者は沖縄県の禹王遺跡調査の必要性を痛感し、2016年度に文献および現地での調査をおこなった。その結果、新たに12件を確認し沖縄本島に13件の禹王遺

跡が存在することが明らかになった。その際、参考にした主な資料は沖縄県教育庁文化課編（1985）、浦添市教育委員会（1999）、那覇市（2004）および塚田（1968、1970）などである。

以下では、沖縄県の禹王遺跡の特徴を簡潔に記載し、その歴史的意義について考察したい。

2. 禹王遺跡の記載と特徴

13件の遺跡はすべて石碑、すなわち禹王碑である。図1はそれらの分布であり、主な特徴を表1に要約した。最初に注意したい点は、沖縄史における太平洋戦争の深刻な影響である。米軍による1944年10月10日の大空襲、1945年4月1日中部への上陸と南下による戦闘、そして敗戦までの間沖縄本島は激戦地となり多くの犠牲者をだした。沖縄戦により文化財や史跡の大部分は破壊され、禹王遺跡も亡失または破損した。本稿では、原碑が存在しない場合でも記録上存在および特徴が明らかなものは遺跡として認定する。建碑年代は西暦、琉球王年、中国年号を記す。なお、碑文は塚田（1968・70）、沖縄県教育庁文化課編（1985）および現地調査の結果をもとに作成した。石碑各部の名称は安里（1991）に従ったが、碑首形態や縁飾の文様などについては取り上げない。

以下では遺跡名、位置（移動や亡失の場合は元の位置、橋碑は河川名）、建立年、禹を含む碑文とその撰文者、遺跡の特徴の順に記載していく。

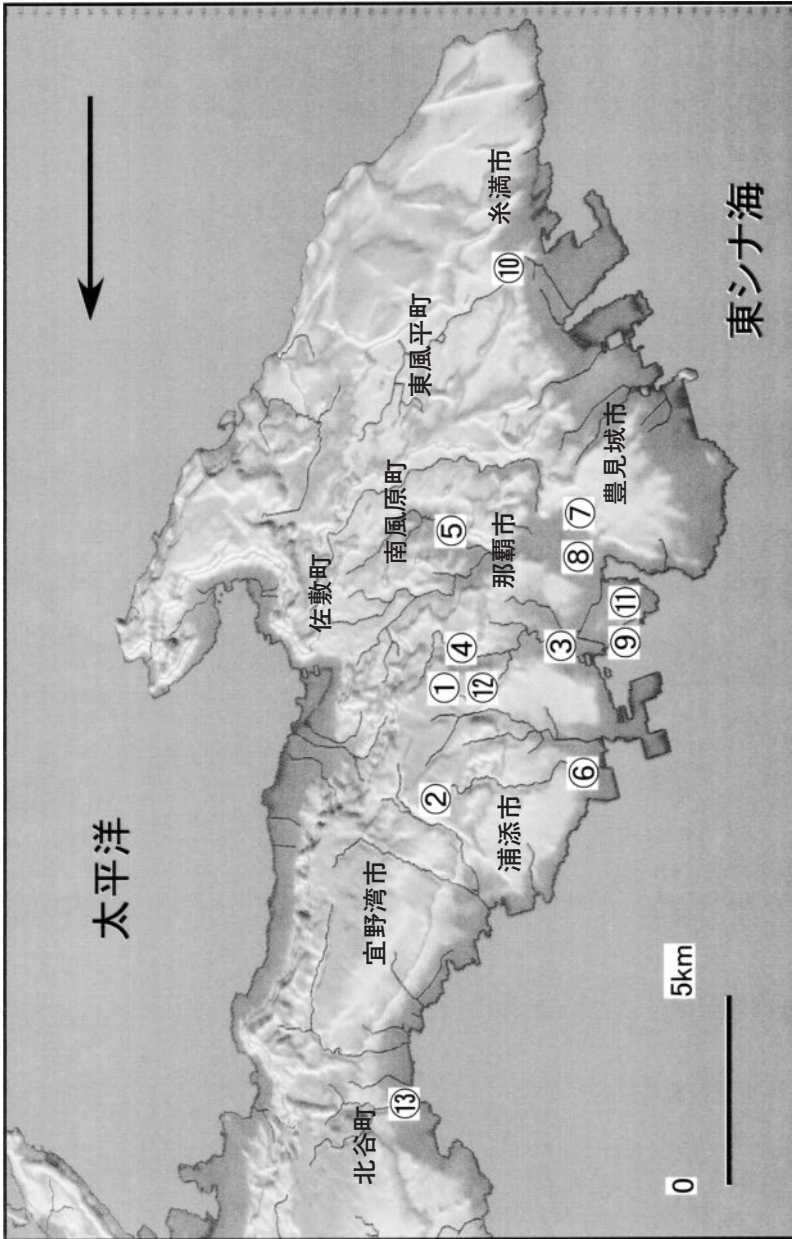


図 1 沖縄本島における禹王遺跡の分布、番号は表 1 と一致する
基図は国土地理院標高 DEM データより大島潤三作成

表1 沖繩の禹王遺跡の特徴

番号	名称	原碑の位置	建立年	建立者	碑文	撰文者	建立の目的
G 1	国王輝德碑	那覇市首里 首里城石門之東	1522	琉球王府	施仁恕於上庶舜禹之智	仙岩 (門覚寺住持)	高真王の顕彰
G 2	浦添城の前の碑	浦添市仲間2丁目 浦添城前	1597	琉球王府	恰相似神禹登駒嶺峰頭	菊隠 (門覚寺住持)	道路と橋の整備
G 3	安里橋之碑文	那覇市泊1丁目 安里川	1677	琉球王府	曷有異禹三過其門而不入之世	鄭弘良 (都通事)	石橋の改修
G 4	金城橋碑文	那覇市繁多川 安里川	1677	琉球王府	臣民悉頌大禹之功	周国俊 (正議大夫)	石橋の架設
G 5	宇平橋碑	南風原町山川 長堂川	1690	琉球王府	而念及大禹治水之功	梁鐸 (通事)	石橋の架設
G 6	勢理客橋碑	浦添市勢理客2丁目 小湾川	1691	琉球王府	思敷禹甸每懷饑溺之憂	梁鐸 (通事)	石橋の架設
G 7	重修石火矢橋碑文	豊見城市豊見城 饒波川	1697	琉球王府	王益広堯仁永懷禹德	阮維新 (都通事)	石橋の架設
G 8	重修真玉橋碑文	豊見城市真玉橋 国場川	1708	琉球王府	王弘敷舜治益懸禹功	曾曆敬 (都通事)	石橋の架設
G 9	中山孔子廟碑記	那覇市久米2丁目 旧孔子廟	1716	琉球王府	伝之禹禹以是伝之湯	程順則 (紫金大夫)	孔子廟の沿革
G10	報得橋記	糸満市照屋 報得川	1732	琉球王府	故禹王治水以功天下	梁鼎 (通事)	石橋の架設
G 11	大清琉球国夫子廟碑	那覇市久米2丁目 旧孔子廟	1756	琉球王府	重祀之國禹貢所不紀	全魁 (冊封正使)	孔子廟の沿革
G12	琉球国新建国学碑文	首里町当蔵町1丁目 国学	1801	琉球王府	固禹貢所不載也	鄭章観 (紫金大夫)	国学の開設
G13	改造池城橋碑文	北谷町北谷 白比川	1821	琉球王府	茲有感於神禹治平之功	毛世輝	石橋の架設

(沖縄県教育庁文化課編1985, 塚田1968・1970などにより編集)

1) 国王頌德碑 那覇市首里城石門之東 1522年(尚真46年・嘉靖元年)
碑文「施仁恕於士庶舜禹之智」

1522年に首里城守礼門西の真珠道起点に建立された石碑で、現存するわが国最古の禹王遺跡である。碑文は琉球文と漢文を用いている(図2)。内容は宮古地方からの宝剣と真珠の献上、殉死を禁じた第3代尚真王の事績の賞賛などを記す。撰文は円覚寺住持の仙岩による。沖縄戦により亡失したが、2006年8月に首里城復元期成会が再建し、現在は首里杜館前の広場に復元碑が置かれている(那覇市2004, 那覇市歴史博物館の聞き取り)。

2) 浦添城の前の碑 浦添市仲間浦添城 1597年(尚寧9年・万暦25年)
碑文「恰相似神禹登岨嶠峯頭」

碑文の内容は首里―浦添間の大平橋の木橋から石橋への架け替えや坂道を石敷にして通行を容易にした事業を記す。この竣工を記念して1597年に本碑が建立された。この事業を実施した尚寧王は浦添で生れ19才で浦添知行、1589年に25歳で王位につく。この経緯から彼はしばしば浦添に行幸しており、首里から浦添に至る道路の整備を命じた。撰文者は円覚寺住持の菊隠。表面文は琉球文、裏面文は漢文で記される。沖縄戦で碑台、碑身と



図2 国王頌德碑の拓本 沖縄県教育庁文化課編(1985)による

もに破壊されたが、1999年9月に同市の浦添グスク整備事業により復元碑が再建されている（浦添市教育委員会1999）。

3) **安里橋之碑文** 那覇市泊 安里川 1677年（尚貞9年・康熙16年）
碑文「曷有異禹三過其門而不入之世」

安里橋は国王の那覇行幸や冊封使の首里登城の際に必ず往還する重要地点である。1452年に尚金福が長虹堤（堤防路）を建設した際、安里川下流の崇元寺前に橋を架けたのが最初である。1670年秋の洪水により破壊されたため1677年に尚貞王が石橋に架けかえたことを記念する碑である。石碑文に事業に関与した三司台や奉行の氏名、工事期間、工事担当の石大工や役夫の人数などを刻む最初の橋碑として注目される。撰文は通事の鄭弘良である。本碑は1677年8月の建立で琉球最古の橋碑といえるが、沖縄戦以前に亡失している（那覇市2004）。

4) **金城橋碑文** 那覇市繁多川 安里川 1677年（尚貞9年・康熙16年）
碑文「臣民悉頌大禹之功」

首里城の南を流れる安里川上流に架けられた金城橋は真珠道^{まだんみち}の橋の一つである。真珠道は首里から島尻方面や識名園、神応寺へ至る重要幹線であった。松材の木橋であった金城橋は1670年9月の洪水で大破した。7年後の1677年に尚貞王により石橋に改修されたことを記念した碑である。撰文者は正義大夫周国俊。金城橋碑は同年10月の建立で2番目に古い、亡失して現存しない（那覇市2004）。約130年後の1810年に本橋の修築を記念した重修金城橋碑が建立されている。なお、2005年に那覇市により重修碑が現地に復元されている。

5) **宇平橋碑** 南風原町山川 長堂川 1690年（尚貞22年・康熙29年）
碑文「而念及大禹治水之功」

宇平橋は国場川の支流、山川地区の長堂川に架設されている。ここは首里と島尻方面を結ぶ要衝の地で以前から木橋が架っていた。虫害や風雨によりしばしば破損したため、尚貞王により石橋への架け替えが1690年9月1日に完成し

た。本碑これを記念したもので、撰文者は通事の梁鏞。碑は沖縄戦により破損したが、ほぼ原形のまま保存され南風原町立文化センターに展示されている。橋碑として本碑は3番目に古い。碑は戦後長い間行方不明になっていたが、熱心な郷土史家と地元住民の協力により1987年5月28日に山川集落内の地下から掘り出された（琉球タイムス1987年5月29日、南風原町教育委員会1987）。なお、2001年3月の山川橋（現在は宇平橋に改称）架け替工事が完了した際、南風原町がレプリカ碑を橋畔に建立している（南風原町教育委員会の聞き取り）。

6) ^{じっちゃく}勢理客橋碑 浦添市勢理客 小湾川 1691年（尚貞23年・康熙30年）
碑文「思敷禹甸每懷饑溺之憂」

勢理客2丁目の小湾川下流に架けられた勢理客橋は1679年に石橋に改築された。しかし、1691年正月の洪水により破壊され、修築工事が同年3月19日から4月8日まで23日間を要して実施された。本碑はこの竣工を記念したもので、撰文者は宇平橋碑と同じ梁鏞。さらに、1741年12月の大雨で橋が流失したため1743年に改修され、これを記念する重修勢理客橋碑が1744年に建てられている（浦添市史編集委員会編1981）。勢理客橋碑は浦添市の文化振興行政の一環として1989年3月10日に中国泉州産の青石を用いて再建された（碑の説明板による）。

7) 重修石火矢橋碑文 豊見城市豊見城 ^の 饒波川 1697年（尚貞29年・康熙36年）
碑文「王益広堯仁永懷禹徳」

饒波川の最下流に架かる橋で、真珠道の一部にあたる。また、那覇湊を守備する垣ノ花、豊見城や屋良座杜城へ至る軍道としても利用された。豊見城直下の饒波川には石造の橋脚に木橋を渡した石火矢橋が架られていた。1694年の台風による洪水が本橋を破壊したため、1697年に石橋に架け替えられたことを記念する碑である。本碑は沖縄戦で破壊され、破片が付近に散乱、碑台は大きく傾いたままの状態で放置されていた。2011年度に豊見城市教育委員会が碑台と碑片を回収、保存した（豊見城市教育委員会2013）。現地には右岸に説明板が

設置されているのみである。

8) **重修真玉橋碑文** 豊見城市真玉橋 国場川 1708年(尚貞40年・康熙47年)

碑文「王弘敷舜治益懋禹功」

国場川が漫湖に流入する直前の最下流に真玉橋は架けられている。ここは首里と島尻方面を結ぶ要衝の地で、真珠道の一部にあたる(沖縄県教育委員会文化課編1984)。真玉橋は1522年尚真王期に木橋として架設、中橋を真玉橋、北橋を世寄橋、南橋を世持橋とよび両端の無名橋を合わせ5橋からなるものだった(久保1990)。それから約180年後の1707年9月1日から1708年3月26日の間に石橋にかけ換える工事が実施された。この竣工を記念した1708年の重修真玉橋碑文中に「禹功」の記述がある。その後、1809年の洪水で世寄橋が破壊され木橋を架けていたところ、1835年の洪水により再び破損した。このため、尚育王による橋改修と北側に世済橋の新設事業が同年3月27日から約1年を要して実施されている。この竣工を記念して1837年(尚育3年・道光17年)に建立された重修真玉橋碑には旧碑文とこの改修記録の両者が刻まれている。旧碑文の撰文者は都通事曾歴敬で、「禹功」および「謹勒石不朽云」を記す。一般に、重修真玉橋碑とは1837年の碑をさすが、本稿では「禹功」を記す1708年の旧碑文だけを取り上げる。重修真玉橋碑は沖縄戦により破壊されたが、1980年5月に地元住民らにより復元碑が真玉橋公民館前に建てられた(重修真玉橋碑文復元期成会1980)。

9) **中山孔子廟碑記** 那覇市久米2丁目 旧孔子廟 1716年(尚敬4年・康熙55年)

碑文「伝之禹禹以是伝之湯」

那覇の久米村は1392年(察度43年)に閩人36姓とよばれる福建地方出身者が帰化して居住した中国人集落である。住民の多くは琉球王朝の外交と貿易、航海などに重要な役割を果たした(田名1989、上里2008)。とくに、朝貢・冊封にかかわる中心的な役割を担っていた。万暦38年紫金大夫蔡堅が中国に入貢した

際、聖像画を持ち帰ったという。尚貞王は紫金大夫金正春の奉請を受け1674年（尚貞6年）に久米孔子廟を創建、1716年（尚敬4年）には中山孔子廟碑記が建立された。碑には琉球国新建至聖廟碑記とも記し、撰文は紫金大夫の程順則。なお、1718年（尚敬6年）に明倫堂が創建されている。孔子廟と明倫堂は久米2丁目2番地の現那覇商工会議所前付近にあった。しかし、昭和19年10月10日の空襲によってすべてが亡失してしまった。また、戦後の道路拡幅（国道58号線）により敷地が大幅に削減されたため、久米崇聖会が場所を久米2丁目、護国寺隣接の地に移して1975年に至聖廟や明倫堂を再建したのだった（那覇市2004）。2006年11月には復元碑が再建されている。その後、2013年に久米2丁目30-1（現松山公園内）に大成殿と明倫堂が新築された際、同時に碑も移転した（久米崇敬会の聞き取り）。

10) ^{むくえ}**報得橋記** 糸満市照屋 報得川 1732年（尚敬20年・雍正10年）
碑文「故禹王治洪水以功天下」

本島最南部の東風平町から発して西流する報得川は糸満市で海へ流入する。下流の照屋は島尻方西街道とよぶ島尻地方から首里方面への要所にあたり、報得川には木橋が架けられていた。しかし、大雨のたびに損傷し不便であるため、蔡温執政時代の1732年に石橋への架け替え工事が実施された。工事は同年8月21日起工し11月1日に竣工、報得橋記碑はそれを記念して建てられた。撰文は都通事の梁鼎による。本碑は沖縄戦の激戦地にありながら奇跡的に完全な形で保存されている（糸満市史編集委員会編2011）。2013年3月28日、糸満市教育委員会は本碑を本来の位置から約60m西方の石橋復元地横に移動させ、屋根を架けて本碑を保存した（図3）。



図3 糸満市，報得橋碑の保存状況（2016年11月撮影）

- 11) **大清琉球国夫子廟碑** 那覇市久米2丁目 旧明倫堂 1756年（尚穆5年・乾隆21年）

碑文「重詛之國禹貢所不紀」

1674年久米村に最初の孔子廟が竣工し、1716年に中山孔子廟碑記が建てられた。大清琉球国夫子廟碑は1756年に冊封正使の全魁が撰文したもので、夫子廟は孔子廟の別称である。本碑は孔子廟の門前に建てられたが、沖縄戦以前に亡失している（那覇市2004）。

- 12) **琉球国新建国学碑文** 那覇市首里当蔵町 1801年（尚温7年・嘉慶6年）

碑文「固禹貢所不載也」

1718年（尚敬6年）程順則の奏請により久米に明倫堂が創建され、琉球における学校教育の魁となった。その80年後、尚温王は国家の治は教育にありと広

く人材を登用するため国学の設置を決め、1798年（尚温4年・嘉慶3年）に首里城北に国学（公学校）を建設した。さらに1800年2月から、龍潭池のほとりに新たな学堂の建設が始まり、約13万余貫を費やして同年10月に竣工、移転した。これを記念して建てられたのが本碑で、国学設置の経過を記す。撰文は紫金大夫の鄭章観である。本碑は沖縄戦以前に亡失し現存しない（那覇市2004）。

13) **改造池城橋碑文** 北谷町北谷白比川 1821年（尚灝18年・道光元年）
碑文「茲有感於神禹治平之功」

池城橋は北谷町の南西部、北谷城跡直下の白比川に架かる橋で、国道58号線が通過する。かつては中頭方西街道に架けられた木橋であり、たびたび修理を余儀なくされた（沖縄県教育委員会文化課編（1985））。尚灝王18年、木橋を石橋に架け替える工事が1820年9月に起工、翌年2月に竣工している。これを記念したのが改造池城橋碑で、撰文者は元世輝。本碑は北谷城の丘斜面に置かれていたが沖縄戦で破損し、県立博物館に保管されている（北谷町史編集委員会編2005）。現地は国道58号の通過する交通量の多い橋で、説明板などはない。

3. 沖縄の禹王遺跡の歴史的意義

前章において沖縄における禹王遺跡13件を記載した。これらの意義について以下に考察していく。

1) 13件の禹王遺跡は全て石碑、禹王碑である。2件は国王顕彰、3件は孔子廟と教育施設、残り8件は橋架設に関わる碑からなる。その分布は首里を中心に半径5km以内に集中している（図4）。この圏外にはG10（糸満市）とG13（北谷町）の2遺跡のみが存在する。⁽¹⁾全ての遺跡が琉球王府により建立されたもので、中央集権体制下において首都付近に集中分布するのは当然であろう。石材として、碑身は本島の島尻層群の細粒砂岩（ニーピヌフニ）、碑台は琉球石灰岩で碑身を挿入する凹部を削り、そこに鉄くさびを用いて固定している（図5）。琉球王国にはグスクや玉陵、石橋などに示される優れた石造技術が発達し、中国的文化を背景に豊富な石材を利用して多くの石碑が建立された。禹王碑は琉球王国の文化を反映したもので、中国から輸入された独自の石碑文



図4 首里を中心とする禹王遺跡の分布，番号は表1に一致する，原図は5万分の1地形図那覇

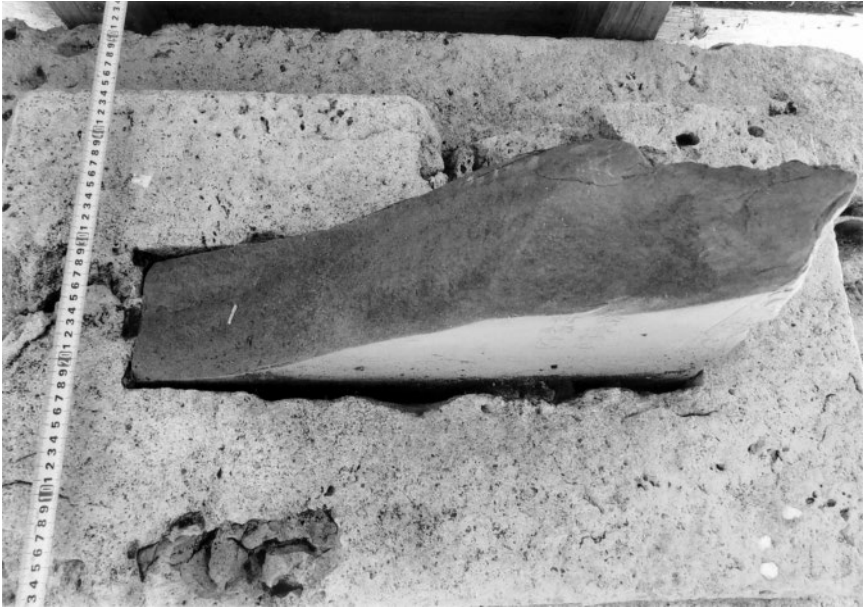


図5 重修石火矢橋碑文の碑台への挿入状況
碑身は暗灰色のニーピヌフニ、碑台は琉球石灰岩
豊見城市歴史民俗資料展示室（2016年11月撮影）

化を形成した。

2) 琉球最古の石碑は1427年の安国山樹華木之碑である。その後、1456年から1495年までの約40年間は梵鐘鑄造によって特徴づけられる時代となり、金石文として鐘銘29件が知られる（沖縄県教育庁文化課編1985）。梵鐘は尚泰久王期に始まり尚真王19年の円覚寺鐘銘を最後に途絶する。そして、1497年（尚真21年）の万歳嶺記および官松嶺記の両碑建立を契機として以後は石碑建立時代が変わる。この変化は尚真王の前期に生じた。13才で即位した尚真が21年目にして自己の判断による実施事業として人工造林を位置づけ、これに関わる両碑が建立されたと考える。以後、彼は玉陵や橋架設などの土木事業を精力的に実施していく。

3) 沖縄県における禹王遺跡は1522（大永2）年の国王頌徳碑から1821（文

政4)年の改造池城橋碑文まで約300年間にわたり継続的に存在する(図6)。13件の禹王碑は第2尚氏第3代尚真王から第17代尚灝王までの時代に相当する。すなわち、古琉球期から近世琉球期をまたいでおり、琉球王国文化の特徴を反映したものといえよう。1522年国王頌徳碑(G1)は現存する日本最古の禹王遺跡であり、1597(慶長2)年浦添城の前の碑(G2)も2番目に古い。本土において1629年には存在したとされる名古屋城内の禹王金像や1632年の大禹像画などより前者は約110年、後者は約35年も古く、現存しない京都鴨川の禹王廟を除くと琉球における禹王遺跡は本土より約1世紀も古いことを示す。ところで、G1の碑は尚真王、G2の碑は尚寧王の顕彰に関わるもので、後者(G2)の建立後には約80年間の空白期間が存在する。石碑全体をみてもこの間に4件のみと極めて少く特異な断絶期をなすといえよう(沖縄県教育庁文化課編1985)。この間には1609年の薩摩による侵略および年貢や物資貢納などが課された過酷な新支配体制への移行が生じた。すなわち政治や社会経済体制の大転換に直面した王府が苦慮しつつこれに対処するため全勢力を注いだことは

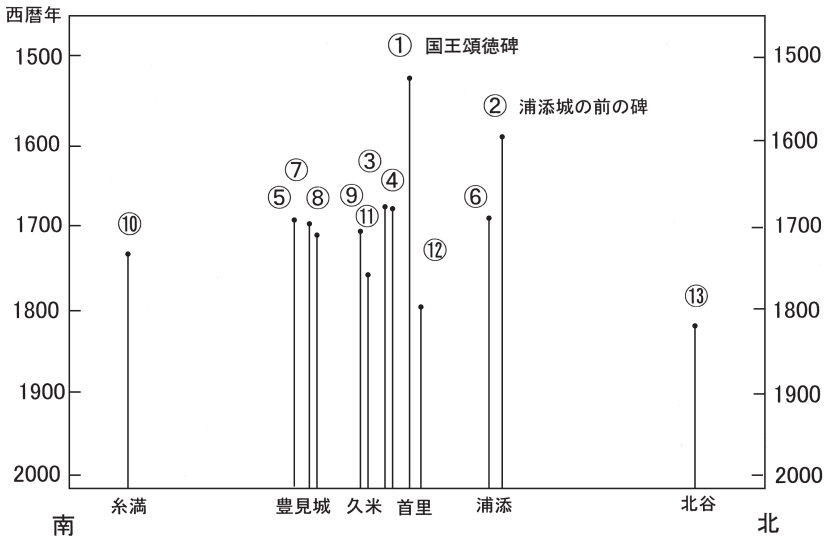


図6 沖縄本島の禹王碑の建立年代グラフ(禹王碑を南北方向に投影して作成)番号は表1に一致する

想像に難くない。1677年の安里・金城両橋碑の建立は王府の運営がやっと軌道に乗り安定化したことの反映といえよう。また、G3 から G8 までの 6 碑が50 年間在位し政治的、社会的安定をもたらした尚貞王期に集中的に建立されたことはこれを裏付ける。これら 6 禹王碑が石橋の架設に関わる橋碑であり、地方支配の強化を背景に交通路の改良や整備が重要課題となったことを示す。以上の考察から、琉球王国の禹王碑建立を1497年以降1597年までの国王顕彰を中心とする前期と1677年以降の橋碑を主とする後期に二分することができる。これは塚田（1968）による建碑史区分とは異なる。この変化の背景として、国王の威信や顕彰などが島津支配下における配慮から姿を消し、橋の架設を中心とした公共事業完成の記念碑に交代したと考える。これは安里（1991）が指摘した碑首文様に生じた変化と同質ものといえよう。

4）禹王遺跡は全て琉球王府により建立されていた禹王碑であり、地域住民が治水や水害除去を願って建碑したものではない。ここに本土の遺跡との根本的な相違点が認められる。すなわち琉球における禹王碑は治水神として受容、信仰されたものではない。G1 と G2 の碑文は禅僧による撰文だが、G3 以後はすべて通事、都通事、正議大夫、紫金大夫などの官職名をもつ久米村の中国系官人より作成されたものである。久米村の官人は儒学や漢文の教養に習熟し、王国の冊封・進貢関係や貿易に関わる実務を担当した知識人でもあった（田名 1989・2008）。彼らは、官生や私費による中国への留学と勉学を経験したものが多く、禹王の記述は彼らの儒学的教養と漢詩作成能力の反映である。また、久米村官人必須の知識として受容されたものである。島津の対中国貿易重視の結果、彼らの職責は拡大し碑文作成も職務の一部とされた。禹王にまつわる事績は国王の修辭的表現として利用、挿入されたものと考えられる。以上の経過から、禹王の事績は明や清などから直接導入されたものといえる。

5）石碑に刻まれた禹王の記述に注目すると、大禹之功、大禹治水之功、神禹治平之功、禹王治洪水など禹の治水功績を述べるものが6件ある。すべて橋碑文に用いられており、洪水などにより破壊、流失した橋を復旧改良する事業の竣工記念碑だった（久保2005）。橋の改築や石橋架設の施工者は洪水からの除災を願い、撰文者はその意識を禹王治水の事績に読み込んだ可能性は否定で

きない。しかし、禹王が治水神として信仰されたとは考えられない。その理由として、①碑の建立や碑文作成が王府により実施され、地域住民は労働者として使役される立場であって主体的な治水神信仰者としての実態がないこと、②沖縄の河川は大洪水を発生させるほど大規模ではなく、川沿いの低地も水田などに利用されることは少なく洪水が生活上大きな関心事になることは稀であったこと、③住民は土着信仰の強い信奉者であり、外来の禹王が受容されることはなかったことが推定される。

4. まとめ

1) 沖縄県の禹王遺跡として新たに12件を追加し、合わせて13件を記載した。これらは全て琉球王府により建立された禹王碑である。2件は国王顕彰、3件は儒教および教育施設、8件が橋碑からなる。

2) 禹王遺跡は1522年の国王頌徳碑から1821年の改造池城橋碑文まで約300年間にわたり存在する。1522年国王頌徳碑は現存する日本最古、1597年浦添城の前の碑も2番目に古い禹王遺跡である。遺跡の6割を占める8件が橋碑である点も特徴的であり、そのうち尚貞王期に6件が集中的に建立された。

3) 沖縄の禹王遺跡は治水神信仰の象徴ではなく、国王顕彰のための修辭的表現として初期は禅僧により、その後は久米村官人らにより禹王の事績が利用されたものである。

4) 禹王碑建立の特徴から、1497年以降1597年までの国王顕彰の前期と1677年以降の橋碑が中心となる後期に二分できる。両期の境界には1597年浦添城の前の碑から1677年の安里・金城両橋碑文までの約80年間の空白期がはさまれる。これは1609年の島津侵略と新たな支配体制への移行と混乱が王府に与えた深刻な影響を反映した結果である。

5) 沖縄の禹王遺跡は中国から輸入された石碑文化と琉球王国における国王や橋架設を顕彰する禹王の事績を修辭的に用いた碑文とが融合した禹王碑によって特徴づけられる。これは東アジアにおいて他に類例をみない特異な文化を形成した。これを琉球禹王碑文化（圏）と称したい。

謝辞

本稿は2017年1月24日、筆者の佛教大学最終講義の内容を修正、追加したものである。主催された歴史学部および学部事務課の皆様に感謝します。調査に際して那覇市歴史博物館外間政明・山田葉子、沖縄県立博物館・美術館田名真之、沖縄県立図書館伊波清秀、久米崇敬会國吉克哉・渡口剛、浦添市教育委員会安斎英介、糸満市教育委員会稲福政斉、豊見城市教育委員会与那嶺豊、南風原町教育委員会平良次子・保久盛陽、琉球大学山田浩世、株式会社国建の皆さんから多くのご教示と討論をいただきました。以上の皆様のご協力により本稿を完成することができたことを記し深く感謝いたします。

注

- (1) 遺跡番号のGは治水神・禹王研究会により提案された地域区分で沖縄県にあたる。大脇・植村(2013)ではF(九州・沖縄)に一括したが、その後沖縄県を九州から分離、独立させGとしたもの。

参考文献(著者のABC順)

- 安里進(1991)『考古学から見た琉球史 下』、ひるぎ社、224p
北谷町史編集委員会編(2005)『北谷町史第一巻 通史編』、779p
田名真之(1989)近世久米村の成立と展開、『新琉球史 近世編(上)』、205～230、琉球新報社
田名真之(2008)久米村の位階、『久米毛氏四百年記念誌鼎』、57～76、久米国鼎会
南風原町教育委員会(1987)『石碑展資料集』、17p
糸満市史編集委員会編(2011)『糸満市史資料編13 村落資料―旧兼城村編―』、459p
重修真玉橋碑文復元期成会(1980)『重修真玉橋碑文復元記念』、35p
久保孝一(1990)『真玉橋之記』、117p、自費出版
久保孝一(2005)木橋から石橋へ～真玉橋の変遷とその構造～、『沖縄の土木遺産』、48～59、ボーダーインク
又吉眞三編(1988)『琉球歴史総合年表』、那覇出版、314p
那覇市(2004)『那覇市世界遺産周辺整備事業石碑復元計画調査報告書』、340P
大井みち(2013)宇平橋碑『治水神禹王をたずねる旅』、94～95、人文書院
沖縄県教育委員会文化課編(1984)『沖縄県歴史の道調査報告書―真珠道・末吉宮参詣道―』、136p

- 沖縄県教育委員会文化課編（1985）『沖縄県歴史の道調査報告書—国頭・中頭方西街道（Ⅰ）弁ヶ嶽参詣道—』、144p
- 沖縄県教育庁文化課編（1985）『沖縄県文化財調査報告書第六十九集 金石文—歴史資料調査報告Ⅴ—』、266p
- 大脇良夫・植村善博編（2013）『治水神禹王をたずねる旅』、人文書院、214p
- 王 敏（2014）『禹王と日本人 治水神がつなぐ東アジア』、NHK 出版、226p
- 瀬田勝哉（1994）失われた五条中島—洛中洛外図を読む—、『洛中洛外の群像—失われた中世京都—』、27～63、平凡社
- 豊見城市教育委員会（2013）『重修石火矢橋碑・豊見城グスク』、豊見城市文化財調査報告書第10集、49p
- 塚田清策（1968）『文字からみた沖縄文化の史的研究』、錦正社、447p
- 塚田清策（1970）『琉球国碑文記』、啓学出版、432p
- 植村善博・木谷幹一（2015）禹王遺跡の国際的分布と大禹謨碑、治水神・禹王研究会誌、2、1～13
- 上里隆史（2008）元祖・毛国鼎の琉球渡来とその時代、『久米毛氏四百年記念誌 鼎』、28～56、久米国鼎会
- 浦添市史編集委員会編（1981）『浦添市史第二巻 資料編1 浦添の文献資料』、418p
- 浦添市教育委員会（1999）『浦添城の前の碑復原実施設計報告書』、111+10p
- 山田邦和（2000）鴨川の治水神、花園大学文学部研究紀要、32、53～86